

## W. ジェームズとG. H. ミード

W. James and G. H. Mead

佐藤 毅

SATO Takeshi

プラグマティズムという思想は、ジェームズやデューイと結びついて知られていたのであるが、今日では、プラグマティズムの原理をはじめて唱えた人が、C.S. パース (1839—1914) であったこと、また、プラグマティズムという言葉そのものもパースの造語であったことも知られるようになってきている。

さらに、ジェームズによってプラグマティズムが、パースの意図とは異なった方向に発展し、濫用されていったことをパースが嘆いたことも知られてきている。パースはある手紙のなかで、「ジェームズはみずからをプラグマティストと称しており、そして疑いもなく彼はこの問題についての彼のもろもろの観念を私からひき出したのですが、しかし彼のプラグマティズムと私のそれとの間には、きわめて本質的な差異があります」と書き、また論文のなかで次のように述べていたのであった。すなわち、「1871年マサチューセッツ州ケンブリッジの形而上学クラブにおいて私はこの原理を、未だ定式化されるにはいたっていないパークリー流の方法を表わす一種の論理的教義としてよく説法したものである、そしてその原理に関する談話の中で私はそれを『プラグマティズム』とよんだ。……しかし1897年にはジェームズ教授がその素材に改めて型を与え、それを一つの哲学説に変貌せしめたのである。そのいくつかの部分に対して私は大いに賛意を表したが、その他の一層際立った部分を私は堅実な論理に反するものとみなしたし、いまでもみなしている。……私は自らの貧弱な格率が別名で呼ばれるべきであるという結論に達した。かくして1905年4月に私はそれをプラグマティシズムと改名したのである」と。こうしてパースは自ら提唱したプラグマティズムをプラグマティシズムと改名してしまったのであった。

このような出生の秘密をもった、プラグマティズムであったが、それはパース、ジェームズ、デューイ、あるいはシラーなどと結びついても、社会心理学者のG.H. ミードとはなかなか結びつかなかった。ところが、近年、ミードは社会心理学者としてだけでなく、プラグマティズムの哲学者として、その独自性がようやく注目されるようになってきている。ここにジェームズとも異なったミードの独自性を私なりに提出しておこう。

ミードに「プラグマティズムの真理論」(1929年)と題する論文がある。ミードがこのなかで、強調していることの一つは、「大文字で書かれるような絶対的真理は存在しないということである。真理はつねに、問題をはらむ状況 (problematic situation) と相関的なものである。問題に含まれていないものは、真でも偽でもなく、ただ、そこに存在しているだけである」と述べていることである。ミードは真理を問題をはらむ状況と相関的とみており、ずばり「真理とは問題の解決ということと同義なのである」と指摘するのである。

ミードがこのように述べるに至ったのは、ジェームズの真理論を意識しているからに他ならない。ジェームズは「思想が、誰かの人の行動によってためされたとき、そして満足のいような結果が得られたとき、その思想は真理なのである」と述べたが、このことに関連して、ミードは

次のように指摘するのであった。「判断とは人間という有機体の経験のうち生起する自然的過程であって、その真理性は、人間たちが自分の問題を解決することに成功する結果生じてくる一種の自然的条件である。ここでの『成功』という言葉は、それに伴いがちな含意をもつので、私としてはあまり好きではない。つまり、成功という言葉は、満足とか満足に伴う快い経験とかと結びつきがちだからである。むしろ、私が提起してきたように、真理の検証は、複数の意味が対立することで抑止されていた行為が再開することによってなされる。ここでいう『意味』とは、事物の一定の性格によって導き出される反応や行為のことである。したがって、真理とは問題解決を『達成』することではないし、ましてやそれを達成した人の満足感のことでもない。こういういい方には、古い快樂主義が犯したような誤りがある」。

こうしてミードは「真理とは、問題の解決ということと同義なのである」として、ジェームズのプラグマティズムとは明らかに一線を画していたのである。このジェームズとミードのプラグマティズムの違いについて、ミードの研究者、H.ヨアスは近年、次のように指摘するに至っている。「……………プラグマティズムでは、少なくとも二つの違った大きな流れを区別しなければならない。すなわち、その一つは客観的な認識的真理と行動の正しさを旨としたものであるが、他方は、その特性において主観主義的なものである。後者のプラグマティズムの思想が、ウィリアム・ジェームズによって代表されるもので、真理を単なる有用性に還元してはいないが、それを——個人主義的観点から——個人の経験や精神的繁栄のために役立つ道具としてみなしたのであった。ミードはいくつかの場合にジェームズが用いたのと同じ用語、例えば、“I”や“Me”，それに“Self”などを用いているが、ミードにとっては、それらの表現はジェームズ概念とは全く異なった概念を指示していた。ミードにとって、ジェームズの心理学は、客観性と普遍性を取り返すというミードの試みを行う地形に境界を画するものにすぎなかったのである」。

ミードにはジェームズの「戦争」の社会的機能に関する論文を紹介しつつ、それに異議を申し立てている論文がある。ジェームズの論文というのは「戦争の道徳的代用物」(1910年)であるが、ミードは「国家的精神と国際的精神」(1929年)のなかで、ジェームズのこの論文を取り上げつつ、それを論じたのであった。

ジェームズの主張の骨子を一言でいえば、戦争を回顧的に見るならば、そこには何物にもかえがたいような重要な精神的価値があるというものである。ジェームズはそれは、「不屈の精神と肉体、至上の価値のためにはどんな犠牲をも辞さない意志、より低次にある自己を超克する能力、空極的目標を終始一貫して他の些細な目標に優先させようとする至上の修練の受容、偉大な事業のもとでの自国のあらゆる人々との一体感、最も高尚な体験にして滅多に到達できないあの精神の高揚」であるとした。だが、ジェームズは戦争反対論者であり、戦争をすることでそれを求めることはできない、そこで「戦争の道徳的代用物」を用意しなければならないと主張したのであった。ジェームズの主張による提案とは、国の若者を軍隊の訓練と同様に不屈の精神と肉体を与えることができるような有益な労働に徴集すべきであり、若者は、自分たちがなすことを通じて社会と同一化したと感ずるようにならなければならないというものであった。

こうしたジェームズの主張に対して、ミードは現実的にも理論的にも疑問を呈したのであった。ミードは次のような興味ある主張をしていく。「もしわれわれが自分の国の、また国際的レベルの生活を本当に考えるのなら、国内での分裂や対立する要素を融合させるために戦争に頼るなどということはもはやできない、ということだ。われわれは理性的な自己意識を通じて、一人の国民であるという感覚に達しなければならないのである。われわれは国民との一体感に頼ることはで

きない。……………確かに、対立しあう集団や個人の経験の内に共通の価値を実現していくことは困難な仕事である。だが、これが唯一、戦争に代わり得るものなのだ。

こうした議論を重ねた上で、ミードは次のようにジェームズとは異なった彼の主張をまとめている。「大戦によって、相争う国々は、複数の国家からなる大きな社会を文明化する、という課題を課せられた。すなわち、大戦によって、われわれは国際的精神の必要性を教えられたのだ。相争う諸国間に共通の利益を発見し、かつそれらを、現存する様々な相違を克服する基盤、共通の生活の基盤とすること、こうしたことをめざす知性と意志の中にこそ、戦争の道徳的代用物は見出されるのである」。

ミードのプラグマティズムには、「問題解決」への志向があり、しかも、単なる国家的精神をこえた国際的精神の必要を訴えるという、すぐれて人類的、普遍的な倫理への志向があった。ミードにとって、プラグマティズムとは、決して「実用主義」とか「道具主義」などに還元しえない、より普遍的、より客観的なものをめざす思想なのであった。 (一橋大学社会学部教授)